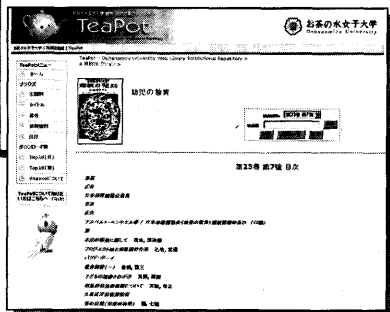


▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (3)

『幼児の教育』をネットで読む キーワード「遊び」から出合った記事

横井 紘子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレ
クション（略称 TeaPot）」にてバックナ
ンパーインターネット公開中。

URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

私にとっての『幼児の教育』の存在

私が『幼児の教育』を知ったのは、大学に入ってからでした。そのころは、研究室の棚にずらっと並んでいましたが、歴史や思想に疎い私は、昔の文章を「史料」として扱う方法がよくわからず、恥ずかしながら古い月刊誌をひも解こうとはしませんでした。興味関心がわいた保育関連の何かしらの事象について素朴に知りたいと思っても、膨大な巻数に圧倒されて、数巻手に取ってバラバラとめくってみるものの、「これだ」と思える記述に出会えないとすぐに挫折し、インターネットで関連するホームページを検索したり、論文検索サイトを利用したりすることが常でした。

私のような歴史研究を専門としていない学生や日々の実践を生業としている保育者にとって、『幼児の教育』を「史料」として読むことは稀だと思います。しかしここ数年『幼児の教育』を通読しておりますが、

歴史的価値が高く重みのある月刊誌であることは重々承知であり、常にその背後にある威光をどこかに感じながらも、私はこの月刊誌に対して非常に近しさを抱いているところがあるように思います。誤解を恐れずに言えば、私にとって現在の『幼児の教育』は非常に身近であり、哲学書や学術書を開く気分になれないときにでも手に取ることが苦痛でなく、疲れた仕事帰りの電車の中でも読もうと思える月刊誌なのです。

このたび、『幼児の教育』がネット公開され、創刊号までさかのぼって、電子ファイル形式で記事を読覧できることは、『幼児の教育』を「史料」として読む研究者の方々に多くのメリットがあることと思います。しかし、電子化された「史料」の扱い方には十分な配慮が必要であると、無頓着な情報の乱用に対し、警鐘が鳴らされているようです。歴史研究者にとどまらず、大学入学時にはすでにインターネットを利用して情報を得ることが当たり前となっていた私たちの世代の研究者

においても、ネットで得られた情報を扱う際に配慮すべき事柄を改めて確認する必要があると思います。

とはいえ、手に取って頁を繰ることにちゅうちょしてしまっただけに歴史を備えた『幼児の教育』も、ネット上で簡単にアクセスできるようになったことで、ずいぶん身近に感じられるようになりました。検索機能があり、興味関心のある記事に簡単にたどりつけるという点も、距離を縮めた大きな要因の一つです。

実は、卒業論文の構想を練っている際に、「今の子ども」の『遊び』が変わってきていると言われていたのが、本当に変わったのだろうか。何が変わったのだろうか」と素朴な疑問を抱いた私は、昔の子どもの遊ぶ姿を求めて、『幼児の教育』を手に取ったことがありました。しかし、見慣れない当時の綴りや文体の解読に苦戦した挙げ句、膨大な巻の中から自分が欲する記事を見つけ出すことができず、途中でさじを投げてしまいました。そこで実際に、「遊び」というキーワー

ドで検索をしてみました。今回、「遊び」というキーワードから、どんな内容の記事に出合えるのか、ワクワクしながらマウスをクリックしました。

いろいろな「遊び」に出会う

その結果、タイトルに「遊び」という言葉が入っている記事が八十五件ヒットしました。「○○遊び」というタイトルが多いことが一目でわかります。「室内遊び」「自由遊び」「リズム遊び」といった言葉も見られ、「遊び」が場所や様態によって古くから区分され、さまざまに価値付けられて語られていたことが伺えます。

しかし、何よりもまず私の心を惹きつけたのは、さまざまな遊びの名称です。どんな遊びであるのか、おおよその想像がつくものもあれば、全く検討がつかないものもあります。「これはいったいどんな遊びなのかしら」と、好奇心がムクムクと騒ぎ出し、次々とファイルを開きました。記事の内容の多くは、その

「遊び」の遊び方や遊ぶ際のアドバイ스가ていねいに書かれており、「遊び」の指南書といえるものであるように思われます。今でこそ、さまざまな「遊び」を紹介する本は書店にあふれていますが、当時の保育業界においては、「幼児の教育」がその役割の一端を担っていたのでしょうか。

とはいっても、遊び方や準備するべき材料などを記号的に記載しているような今日の多くの「遊び」の指南書とは、ずいぶん性格が異なっているように感じます。それは、子どもたちが実際に遊ぶ姿が併記されていたり、その遊びがいかに素敵で楽しいものかについて流麗な文章が添えられていたりしているからかもしれません。また、その「遊び」が、どこから飛び出してきて単独で浮遊しているのではなく、実際の「生活」という大きな流れに根付いている印象を受けるような文章が多いように感じられます。「遊び」の「辞典」としてではなく、時代を反映した「読み物」とし

ての「遊び」の紹介といえるかもしれません。

「遊ぶ」子どもたちに出会う

検索結果の一番上には、「お角力遊び」とあり、力士の紙型が載っていました。ほかにも、「八百屋遊び」「郵便局遊び」「おもちゃ屋遊び」「汽車遊び」……など、今日においても楽しまれている「遊び」も多くあり、その「遊び」に興じる子どもたちの姿が保育者の言葉でていねいに記述されているものもあります。そのような保育実践事例ともいえるような記事を読むと、私自身が実際に保育の中で出会った「遊び」が自然と思いつき出され、そこで活き活きとした子どもたちの姿と重なり、その文章に子どもたちが息づいているように感じられ、思わず引き込まれてしまいます。

一つ、記事を取り上げたいと思います。発行年数が一九二七年、東京女子高等師範学校附属幼稚園山の組の実践事例、「おもちゃ屋遊び」からです。山の組で

「おもちゃ屋さん」を大々的にやることになり、準備を子どもたちと共に進めていったようです。「前日にはお室の大體の裝飾が出来、全園の各組にポスターが配られました。山の組は云ふまでもなく、園全體何となく浮き立ってゐる様に感じられました」という記述があります。二〇〇七年度、私がお茶の水女子大学附属幼稚園で年少クラスの川の組で担任として子どもたちと過ごしていたときにも、年長児が、「こどものくに」という、ぬいぐるみ屋、ケーキ屋、回転寿司屋などの



内校編纂師普高女子大東
會編圖種幼本白

幼児の教育

第七卷
第一号

おもちゃ屋遊び	山組	54-55
...

『幼児の教育』第27巻
第1号 (1927年1月発行)
「おもちゃ屋遊び」
p 54 ~ p 55掲載

ありとあらゆるお店屋さん、博物館、ゲーム、お化け屋敷、水族館、ショー、海賊船に乗って遊覧あり、という夢のような空間を、遊戯室に創り上げてくれました。前日にはポスターを持って年長児がお招きに来てくれ、園全体が「こどものくに」が待ちきれない雰囲気になっていました。

一九二七年の附属幼稚園では、「どこの組の子供も『山の組のおもちや屋、もう始まるんぢやない?』と云つて、ろく、落ち着いてお仕事が出来なかつたそうです」。二〇〇七年度の川の組も、子どもたちはいつもより早く支度を済ませ、廊下の奥を見ながら、「まだかな」「ちよつと行つてみようかな」などと、そわそわしていました。

また一九二七年の附属幼稚園では、ほかの園児を迎える側の子どもたちは、「我れ開ぜず焉といふ態度を出してゐる番頭さんや、夜店の競賣そつくりの呼聲を出して客を呼び集めてゐる番頭さんもありました」。二

〇〇七年度の年長児も、保育者顔負けのショーの司会をする子もいれば、自分が作った場所に自信をもち、いつもより凛として年少の子どもたちとかかわっている子、あまり目立たない場所に陣取つてしまひどう呼込みをしようかと少し尻込みしている子、一人ひとりの子どもが自分なりに「こどものくに」で過ごしていた姿が思い出されます。

八十年もの年月差を、この文中の子どもの姿からは感じられません。むしろ、その活き活きとした姿に本質的な違いは認められないようにも思われます。文体に古めかしさは感じますが、そこで浮かび上がってくる子どもたちの姿には時代の差や理解しがたさは全くありません。「遊び」へと転じるきっかけや、何におもしろさを感じるのかは、八十年の間に物理的に生活が大きく変化したこともあり、多種多様になってきていますが、それでも昔から変わらない子どもたちの姿を認めることができるように思います。

ネットの活用

私は、『幼児の教育』を読む際、研究論文に向けて知識を蓄えることや自分が今もっている知識を試すことを一義的な目的とはしていない場合が多いです。しかし、頁をめくり、ある文章に出合った途端、思わず閉じかけていた目が見開いたり、突如として自らにくさびが打ち込まれて揺さぶられたりする経験がしばしばあります。このような経験は、誰しもあることでしょう。

私のような構えで『幼児の教育』と対峙している読者にとつては、ネット公開のおかげで身近な『幼児の教育』が増えたといえるでしょう。それは同時に、『幼児の教育』を通して子どもの姿が活き活きと眼前に現れるような記事や、自らの存在を揺さぶられたりするような文章に出合う機会が増えたとも換言できるのではないのでしょうか。

また、詳細は紹介できませんが、今回の検索で出合った第二次世界大戦の最中に書かれた「遊び」の記述に、思わずスクロールする手が止まったこともありました。身近になりはしながらも、日本の幼児教育の黎明期を支えてきた歴史ある月刊誌であることに変わりはありません。日本の幼児教育をどのように語ればよいのか、出来合いの思想も言葉もない時代に、保育に携わる人々が、時にはさまざまな時代の大きな波に流され、時にはあらいながら紡ぎだしている文章には押しつけがましくはない力強さを感じます。

確かに、クリック一つで目の前から消滅してしまうはかない邂逅かいこうですが、私に啓発的な光を与えてくれる記事に敬意を払いつつ、その出合いを大切にしながら、『幼児の教育』との新しいつきあいを模索してみようと思います。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科)